

## 河野清実さんの事も

清原貞雄

河野清実さんの祖母と私の祖母とが姉妹であるから河野さんと私は所謂二いとこの間柄である。河野さんの生家は朝来村で父親は神職の傍ら農業をやつて居り、あまり豊かな家庭では無かつた。私の家は杵築で河野さんの家とはあまり頻繁な交渉は無かつたが、河野さんは先づ秀才と云われる方であつたらしく、学問に志を立てながら家計の關係上、都会に出て学校で学ぶ事は到底出来ないで私の家に寄寓して、大体独学の形で勉強して居つたようである。ようであると言ふのは私がまだ小学校の頃で詳しい事は私には解らなかつたのである。何を目的として出て来たのかも私には解らなかつた。私の父が医学を少々やつて居つたので漠然とそんな事を考えて居つたのかも知れぬ。家では平家物語等を読んで居つたようである。其の頃杵築に加藤と云う書の先生が居つて暫く習を習いに行つて居つた。尋常小学の課程以外で河野さんが師に就いたのは前後を通じて只之れだけであろう。其の外画の稽古をして居つたが之は全然独り稽古で、水彩画のようであつたが、専ら肖像画を書いて居つた。

後年には謹厳其のものゝような人であつたが、私の家に居つた頃は仲々の飄軽者で愉快に暮して居つたようである。家

には嫁入前の私の叔母が二人も居り、私の姉や妹も居つて賑かであつたので随分ふざけて遊んで居つた。何時か連れ立つて盆踊りを見に行つた事がある。河野さんは蔭に隠れたと思つたら風呂敷を頭からスツポリ被つて出て来て踊りの列に加わり無茶苦茶な踊りを始め、時には他の踊り子に喧嘩でも吹きかけるような擬勢を示した。人と喧嘩など出来る人でないのでどうなる事かとほら／＼したが、河野さんは人並外れて小さく全く小供のように見えた為か、相手が笑つて居るので喧嘩にもならず、其の内河野さんは列から離れて又蔭に入つて風呂敷を取つて出て来て我々の所に帰り一人で腹を抱えて笑つて居つた。自分で手品を工夫しては叔母達に見せて居つた。大変寝像が悪く直ぐ枕を外すのを皆から冷かされるのをくやしがつて、枕を頭にしぼりつけて寝たら其の枕が前に廻つて額につけたまゝで朝まで寝て居つた事がある。東枕に寝ると朝は大抵西枕になつて居る。或る朝東枕のまゝであつたので、大変得意になつて居ると枕は足の方にあつたので一回りした事がわかつて大笑した。

こう云う一面もあつたが大体が非常に勉強家で、殆んど手から書物を離さないと云う風であつた。一度私が無理に引張

り出して川に釣りに行つた事があるが、渋々行くには行つたが二、三冊書物を抱えて行つて釣竿を下したまゝ放置して書物ばかり読んで居つた。

河野さんが国学に志した主な動機は多分物集高見博士であつたと思う。物集博士の助手をして大辞林を作り上げた諸富某と云うのは河野さんの同郷であつて、其の人の話は河野さんがよくして居つたので、其の刺戟では無かつたかと思う。何時から歴史の方へ變つたのか、其の動機が何であつたかは知らぬが、私の家に居る中に、もう歴史に志して居つたらしく日本歴史の辞典を作ると云つてボツ／＼材料を集めて居つた。之は明治二十七、八年頃で歴史辞典等は全然無かつた時であるから河野さんの獨創的の思いつきであつたらう。無論之は物にならなかつた。私の家に居る中に中等教員検定試験を受ける準備をして居つた。萩野由之氏の日本歴史を熱心に読んで居つたようである。愈々試験を受くる頃には朝来に居つて居つた。予備試験を受けに上京した時の手紙に、あまり六ヶしくは無かつたと書いてあつたが果して首尾よくパスした。然し金が無いために遂に本試験は受くるに至らなかつた。其の内何時から朝来村で父の後をついで白鬚社の神職になつた。私が京都大学に入つてから、賀茂神社の官司と懇意にして居つたのを頼つて、無格社の白鬚神社を郷社にしたい、それに就いて白鬚神社を京都の八坂神社の御分霊と云う事にしたから一骨折つて呉れとの事で、私は予て知合の

賀茂の官司に頼んで八坂神社の官司に紹介して貰い之は首尾よく目的を達した。

其の前、河野さんは田染の習説校と云う塾で暫く教鞭を取つた。之は師範学校の受験準備のための学校で古い学校長さんの中には河野さんの教えを受けた人があるかも知れぬ。其の後河野さんは無資格のまゝ福岡県の八女高女の国語の先生になつて行つた。私が広島文理大に居る頃、河野さんは中等教員の認定免状を取りたいから文部省の誰かに頼んで呉れぬかとの事で、其の爲には俸給の一年分位は出してもよいと云う事であつた。丁度文部省の書記の白石氏が大学の事務官に赴任して来たので話したら、白石氏が其の筋に話して呉れて之は一銭も使わずに出来た。金を使わずに成功すると云う事は当時異例であつたそうで、河野さんは大変喜んで仲間盛んに吹張したようである。

河野さんは所謂辛酸を嘗めた人である。にも拘らず最後まで純真さを持ち続けた人である。私の最も敬服したのは其の点である。一口に云えば七十を越しても子供の様な人であつた。一面には孜孜として研鑽を止めぬ篤学の人であつた事は誰も知つて居るが、他の一面子供の様な純真さを持つて居つた事を知つて居る人は少ないかも知れぬ。晩年、桜八幡社の社司をして居る時でも衰も表も無く策も略も無い人であつた。それ故悪ずれをした田舎政治屋の中には河野さんを小馬鹿に

して居つた輩もある。然しそんな連中には河野さんのよい所は分らないのである。河野さんの子供らしい純真さを示す一例としては先年県から文化の日に表彰された時の事があつた。其の前年に寧ろ河野さんより後輩の人が表彰されたに拘わらず河野さんには何の沙汰も無かつた。之れは推薦に当つたあの地方の某校長が小細工をしたのである。あの人のよい河野さんもさすが腹に据え兼ねたと見えて私の所に其の鬱憤を洩らしに來た。私は之を俵に話して俵から県の当局に話して貰つた結果、直ぐに河野さんも表彰される事になつた。其の時河野さんは子供の様に喜んで表彰式の帰途態々杵築に下車して記念品に貰つた重たい置時計を抱えて私の所に見せに來たものである。真に可愛いおぢいさんだと思つた。

河野さんには一女一男があり、長女は他に嫁した。長男は

### 質疑應答

#### 竹内節三に就てお答

久多羅木儀一郎

昨年三重の土生米作氏から大分の竹内節三のことに就て質問を受けたので、荷揚町の竹田家の子孫や、竹内家の檀那寺淨龍寺の過去帳等を調べたが、遂に得る所なく、そのまゝ

に打過ぎて甚だ失礼しています。最近序があつて市役所所蔵の除籍簿を調べたところ、漸く分明したので、延引ながら左にお答を申し上げます。

節三は竹内円平（淡軒）の二男で文政十二年四月七日に生れた。竹内駿策の養子になり明治十一年当時は大分師範学校に在勤中であつた。旧千歳村の壬申戸籍によると、明治十五年山津の森謙三の二男央を養子にしている

大変出来のよい子で河野さんも後年を楽しみにして居り、周囲の人々も大いに期待して居つたが不幸脳を病んで歿したので長女の子供を貰つて養つて居つた。之が成長するまで長生きせねばならぬと口癖の様に云つて居つたが突如として長逝せられたのは気の毒である。河野さんは酒も吞まず煙草も吸わず、やせ型であつたのに意外にも脳溢血で逝つた。真に突然であつた。朝、他出から歸つた所に來客があり、対談中にガツクリと伏して其のまゝであつたそうなる。遺族は困るうが河野さんにして見れば後の事を心配する暇も無く、知らぬ間に死んでしまつたのであるから、却えつて幸福であつたと云えるかも知れぬ。

（本会顧問、大分県史料刊行会監修委員、文学博士）

（東浦）